

高島市 歴史散歩

No.4

継体天皇と高島市

『日本書紀』や『古事記』に登場し、5世紀後半から6世紀前半に実在したといわれる継体天皇は、高島市と関係の深い人物として知られています。

継体天皇は、即位までの経過に疑問点が多いこと、またその出身地について、『日本書紀』では越前国三国（福井県三国町）、『古事記』では近江国（滋賀県）とされるなど、いろいろと謎の多い天皇とされています。

ただ、この継体天皇の父である彦主人王が近江国三尾（高島市）の出身であること、また継体天皇の後妃8人のうち4人が近江国出身であることなどから、近江国とくに高島市との関わりは早くから注目されてきました。

高島市内には、現在も継体天皇にまつわるいくつかの伝承や文化財が残されています。

安曇川町常磐木にある三重生神社は、継体天皇の両親である彦主人王と振媛を主祭神とし、由緒で

は、彦主人王がこの場所で亡くなったので、後に社を建てて振媛を併せて祭ったと伝えられています。また、この神社の南方約500メートルの場所

には、彦主人王の墓とされる田中王塚古墳があります。その近くの安曇川町田中の馬場区と陵



田中王塚古墳

区が接する辺りには「三尾神社跡」とされる場所があり、こ

こには振媛が継体天皇ほか2児を無事に出産したときにもたれたと伝えられる「もたれ石」が残されています。三尾神社は、高島市南部に勢力をもっていた古代豪族三尾君に關係する神社といわれ、「三尾」の名前は、高島町拜戸の水尾神社や安曇川町三尾里との関わり



「映」撮影：田中延子さん
第5回湖西（高島市）風景写真コンテスト
最優秀賞作品



もたれ石

その三尾里には、継体天皇の第一皇子の安閑天皇を主祭神とする安閑神社があります。神社の詳しい由緒などは分かっていませんが、この神社の境内には「神代文字」を刻んだ石碑があることが知られています。文字は、記号とも絵ともいえるもので、装飾古墳の一部であったとも、三尾神社に伝わった「秀真伝」に記される古代文字と関係のあるものとも言われています。

（文化財課）

編集後記



湖西（高島市）風景写真コンテストで最優秀賞を受賞された田中延子さん

▼「ただ美しいだけでなく感動的な部分が強調されるように撮影しました。湖西で初めての出版が今回の受賞となり大変喜んでいました。」とは、最優秀賞を受賞された田中延子さんのコメントです。▼「感動できる風景がすぐそこにある」。コンテスト入選作品を見て実感しました。応募総数359点から選ばれた23点の入賞作品は、それぞれとても素晴らしい、ここで全てを紹介できないことがとても残念です。今月号で紹介した作品以外の入選作品の展示会場などを知りたい方は、湖西こだわりの郷協議会（☎22-318）までお問い合わせください。▼みんなが待ちに待った春は、幸せな気持ちいっぱいの花の季節です。さあ、カメラを持って出かけましょう。みなさんの感動スポットを教えてください。

（広報担当）

高島市 歴史散歩 No.15

神話と歴史の息づく集落 ― 拝戸 ―

高島市南部には、継体天皇や三尾君にかかわる地名や史跡が数多く残されています。

その中の一つ、拝戸集落の嶽山山ろくに位置する水尾神社は、三尾君の始祖とされる磐衝別命と継体天皇の母であるヒメガミ(振姫)を祭神とする神社で、元は三尾川(現在の和田内川)をはさんで北本殿と南本殿が鎮座していました。

伝えられるところによると、磐衝別命は猿田彦命の神道を学ぶため、猿田彦命を祭る高島の三尾の地にやって来て、三尾山の麓に家を造り、そこから朝夕三尾大明神(永田の長田神社)をおがんだため、後に、この居宅のあった場所を拝戸と称し、その地に水尾神社が建てられたといえます。

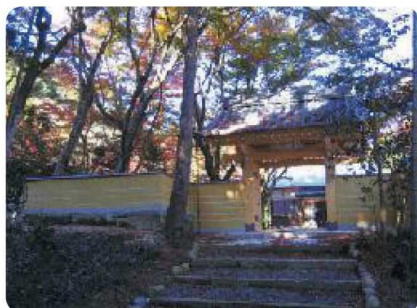
それから約百年後、今度は応神天皇の皇子の速総別王が神道を学

ぶために拝戸の地に住み、その四世の孫である彦主人王の妃の振姫は、水尾神社の拝殿を産所として継体天皇を含む3人の子どもを産みました。水尾神社の北本殿は、振姫出産のときに彦主人王が安産を祈った仮社跡に建てられた社だといわれています。

また、拝戸の臨濟宗寺院・禅智院は、水尾神社と深いつながりがあったことが知られています。禅智院は、臨濟宗南禅寺派の尼寺で「高島尼御所」とも称されました。開基は鎌倉時代、後嵯峨天皇の孫娘にあたる道栄尼によるものと伝



水尾神社



禅智院

えられます。道栄尼は水尾神社とのかかわりも深く、水尾神社にはそのなごりか、鎌倉時代の優れた石塔や石灯籠が残されています。水尾神社周辺は、古くから「高嶋宮」の跡とも考えられ、現在に続く「高島」の地名の発祥を考える上でも、重要な地域であると思われま

(文化財課)

編集後記



3月1日より改裝する高島市ホームページのトップ画面(案)
<http://www.city.takashima.shiga.jp>

▼平成17年度を締め括る3月になりました。今月の特集(2・3頁)は、高島市誕生からの15ヶ月を写真で振り返ってみました。市になって最初の年、こうしてみると早かったなあと感じます。子どもの頃は一日があんなに長かったのに、今度は一年があつという間。この時間の感覚の違いは何なんだろうとちょっと悩んでしまいました。▼時代の変革期に刻まれていく高島の歴史。その中には多くの皆さんがまちづくりの主人公として、また縁の下での力持ちとして登場されています。広報紙では、これからもそういった多くの皆さんに登場していただきたいと思っています。

▼3月1日午前10時より市のホームページがリニューアル(改裝)します。市(役所)の情報は市民のもの。当たり前のことですが、常に最新の情報を、もっと丁寧に皆さんにお伝えできるように職員全員で気張っていきたいと思います。また、「民間の事は民間で」との思いから始まった地域ポータルサイトも頑張ってください。風通しナンバー1のまち高島を目指します。

(広報担当)

音羽古墳公園



音羽古墳公園

JR近江高島駅を下車し、北西に進んでいくと高島小学校・中学校を過ぎ、小田川を渡ると音羽の集落に入ります。集落の里山には大炊神社が鎮座し、神社周辺に音羽古墳群が点在します。この古墳群は数十基からなる6世紀後半から7世紀初頭にかけての、付近の有力な一族を葬った古墳です。各古墳は各家の家父長が造墓し、その後家族も葬られる性格の墓で、群集する特徴があります。この様

な墓を造れるということから、周辺地域が非常に豊かな土地柄であったと思われる。

大炊神社東手のリトル比良山道を登り、すぐの小田川を渡ると石穴と呼ばれる字に、17基からなる石穴支群があり、昭和58年にそのうちの数基が発掘され、3基が音羽古墳公園で公開されています。古墳は大半が江戸時代の開発でつぶされていた。しかし、ていねいな調査をすることによって、主体部である横穴式石室が現れてきました。石室内には木棺が納められていたであろうと想像させるくぎ類や、黄泉の国の食事に使う食器などが出土しました。特に、10号墳では奥壁に棺を載せる台石がすえられる特異な構造の石室が発見されました。また、14号墳の出土遺物のなかには、銀象嵌とよばれる金工技術を施した大刀の鐔が出土しました。当時のハイテク技

術を駆使した大刀を有する被葬者像は、高島の地で活躍し、中央政権とも交流のあった者であったろうと想像でき、興味がそそられるところ。

秋の一日、音羽の里山を尋ねて音羽古墳公園にたずめば、古代人の黄泉の国に対するイメージがふくらんでくるかもしれません。

(文化財課)



編集後記



柿がおいしそうに色づいてきました。パパイアに似て甘そうですが、これ渋柿なんです。(今津町深清水にて)

▼太陽に照らされた雲が真っ赤に燃え、空に複雑な表情を描きます。夕焼けがきれいな季節になりました。柿も夕焼け色に染まると、いよいよ出荷の最盛期を迎えます。柿は「赤くて大きい」のがおいしいといわれますが、おいしい柿を選ぶには、夕日にかざさないことが第1の条件です。▼市内では実りの秋を満喫する収穫祭などのイベントが目白押し。今月の表紙はマキノピックランドで行なわれた「マキノカントリーフエスタ2006」の様子をご紹介します。向こうの山まで届けとばかりに投げ放たれたイガ栗。「痛いっ!」と響き渡る声に、沸きあがる会場。痛みに耐えたその記録は…! ▼高島の秋は豊かです。栗、柿、そばに、かぶらや大根。それらが織り成す景色はすっかり秋の風物詩に。人にも、大地にもしっかりと根付いたこれらに、付加価値をつけるのはまだまだこれからです。(広報担当O)

高島市 歴史散歩 No.24

継体大王にまつわる伝承とその遺跡

高島市と関係の深いことで知られる継体大王(天皇、オホド王)は、『日本書紀』によると、507年に河内の樟葉(現在の枚方市)で即位したと伝えられ、来年2007年は、即位から1500年という節目の年にあたります。

高島市には、継体大王誕生の地としての伝承が残されています。『日本書紀』によると継体大王の父の彦主人王は、応神天皇の子孫で、近江国高島郡の「三尾の別業」に住んでいたときに越前国坂井郡三国(現在の坂井市)の振媛を妃に迎え、そこで継体大王が生まれたといわれています。

継体大王誕生にまつわる伝承地は、主に高島市南部に複数伝えられていて、振媛が継体大王ほか2児を無事に出産したときにもたれた石と伝えられる「もたれ石」は、安

曇川町田中の馬場区と陵区が接するあたり、現在三尾神社旧跡とされる場所にあります。

また、継体大王誕生のときの胞衣(胎盤)を埋めたと伝えられる胞衣塚が、安曇川町三尾里区の南端に位置しています。これは直径約11.5メートル、高さ約25メートルの円墳で、古墳の上に生えている松は「ごんでんの松」と呼ばれています。



胞衣塚

また、拝戸の水尾神社も、その拝殿が振媛の産所となったと伝えられる神社で、さらにその北本殿は、彦主人王が振媛の安産を祈った仮社跡に建てられた社であるともいわれています。

(文化財課)



編集後記



この時期はおいしい農産物もたくさんありますが、美しい景色もご馳走です。
(朽木小入谷にて)

▼ビュービューと落ち葉を巻き上げる風が、子どもたちの頬を赤く染めていきます。山々の木々もすっかり色つき、私たちの目を楽しませてくれるとともに、冬の訪れを予感させます。紅葉にも年によって良し悪しがあるそう、良い紅葉になる条件は、台風の影響がなく、夏の日照が十分で、紅葉直前によく冷え込むことだそうです。紅葉からもこの一年が振り返れるようです。今年の紅葉はいかがでしたか。▼市内では秋イベントもたくさんあります。今月の表紙は近江今津北国海道(浜通り)で行なわれた「おいでやす近江今津」の様子をご紹介します。懐かしさをテーマに開催されたこのイベントには、こまやめんこ、紙芝居やてっちゃん(ピーアそび)、縁日広場での当りもんなど、一世代も二世代も前の遊びが並びます。立ち止まって眺めていると、なぜか時がゆったりと流れているような気持ちになります。効率とスピードを優先して、いつも時間に追われている現代のライフスタイル。毎日のちょっとした工夫で、スローなひとときをすごしたいものです。(広報担当O)

高島市の新しい指定文化財

高島市教育委員会は、高島市文化財保護審議会の答申を受け、昨年12月21日、次の2件を市の文化財に指定しました。

《史跡 河原市一里塚跡》

一里塚は、通行距離の目安として、街道の両脇に一里ごとに造られた塚のことで、全国的な整備がされたのは、江戸時代初頭のことです。高島市内を南北に通る北国海道(西近江路)の沿道にも一里塚は造られ、『高島郡誌』等によると、市内では7か所に一里塚があったといえます。ただ、それらのほとんどは、現存しなかったり、場所が不明になっていたりして、今回指定された新旭町安井川の河原市一里塚跡は、市内で唯一、江戸時代



河原市一里塚跡

《無形民俗文化財 高島音頭》

高島音頭は、高島地域(旧高島郡内)に伝わる踊り歌で、発祥は室町時代ころとも伝えられます

の位置や形状を明確に伝える貴重な塚跡であるといえます。河原市は、北国海道に置かれた7つの宿場のうちの一つで、その名称は中世の紀行文にも登場します。それらの記述や、江戸時代の馬数に関する記録などから

は、早くから宿場としての機能を持っていた河原市の姿をつかうことができます。

が詳しい記録などは残っていません。現在、高島音頭は各地域の盆踊りや神社の奉納踊りなどで踊られています。一方では伝承者の減少も課題となっています。高島音頭の特徴は、伝承される地域によって歌の文句や節回し、踊り方などに違いがあることで、今回の指定は、一般的に高島音頭と総称される踊り歌とその同系統の踊り歌全体に対するものです。

(文化財課)



高島音頭

編集後記



この雪下で、たくさんの生命が春の訪れを待っています。

(畑にて)

▼昨今の今頃は、背丈を越える積雪で、雪かきに追われてたことが、少し懐かしく思える今年の天候。でも春に向けて、この雪の下で、高島の恵みは蓄えられていきます。▼今月の表紙は「第31回元旦走ろう会」の様子をご紹介します。辺りがまだ薄暗い元旦の早朝、午前7時に到着するようにと自宅を出発した人々が水尾神社(高島市拜戸)を目指します。二元旦に、誰でも気軽に参加できるイベントを」と始められたこの会も今年で31回目。この会を支えてくれる人がいて、身の丈に合わせ小さな改善をコツコツとやって来たことが今日まで続いた秘訣だとか。「身の丈が足りないからと背伸びをすれば、どこかにゆがみが来る」ということを教えていただき、心新たに新年を継体天皇ゆかりの地でスタートしました。

(広報担当)

歴史散歩

No.36

継体天皇をまつた古代高族
三尾氏族の石室発見！

『日本書紀』によると継体天皇は

「近江国高島郡三尾別荘」で生まれたとされ、市内には関連する史跡や地名・神社等が多く残っています。なかでも安曇川町田中に所在する田中古墳群には、継体天皇の父「彦主人王」の墓とされる宮内庁の陵墓参考地が所在し、継体天皇建立に尽力した三尾氏との関連が考えられる遺跡です。

市教育委員会では、今年5月から道路改修工事に先立ち、田中古墳群(36号墳)の発掘を実施しました。36号墳は田中神社の東側に位置する直径24mの円墳で、調査の結果、全長約7m、幅2・1mを測る横穴式石室とよばれる埋葬施設が発掘されました。横穴式石室は方形に加工した石材で構築され、床面には川原石が敷かれていました。石室の奥側には遺骸を安



置たとされる空間を構築していました。この空間の床面や壁面は、赤色顔料(ベンガラ)が塗られ、赤い石の部屋に遺骸を埋葬していたことがわかりました。

石室内からは、武器・馬具・須恵器・ガラス玉・耳環など多くの副葬品が出土しました。特に金銅で装飾された馬具などが多く出土したことから、この古墳に埋葬された人物はかなりの有力者であったことが推察されます。

36号墳で確認された横穴式石室は、遺骸を安置する空間を特別に設けるなど、全国的にも類例が確認されない特異な構造でした。古墳が造られた時期は、出土土器から8世紀後半とされ、この時期の首長墓と考えられます。周囲には、継体天皇関連の伝承や

史跡が多く存在し、その立地からも高島平野南部一帯を治めた三尾氏族の首長墓と推定され、彦主人・継体父子を支えた三尾氏が継体朝(607〜531年)以後もこの地において勢力を掌握していたことを示す発掘となりました。今回の調査結果は、隠の多い継体天皇に関する研究を進める上でも、当該地の地域史を考える上でもきわめて貴重な新資料といえ、継体天皇即位1500年という記念の年に意義深い調査成果となりました。(文化財課)



編集後記

心強いパートナーが誕生
(今津町桜川で)

▼今津町桜川で行われたイベントで、山の手入れに励む家族を見つけた。小さな子どももノコギリを片手に懸命に木を切っています。林業体験かと思いきや、腰刀用の燃料確保だとか。山に敬音がこだましています。森を守る心強いパートナーの誕生です。▼市内各小中学校の代表が、音楽発表会を通じて交流を深めました。今月の表紙は、11月14日(水)と15日(木)にガリバーホールで開催された「2007高島市音楽会」の様子をご紹介します。静まり返った会場内、舞台上立つ子どもたちはやがて黒板した様子。振り上げられた指揮者の手に、子どもたちの視線が集中します。「出だしに気を付けて」「風をあわせて」「そんな心のささやきが聞こえてきそうです。子どもたちの歌声は、何かと忙しい日々、心の余裕をなくしてしまっていることを思い出させてくれます。深呼吸して、耳を澄ませてみると、大切な人のささやきが聞こえるかもしれません。(広報担当)

歴史散歩

No.40

継体天皇伝承地「えな塚」

皆さんは、「エナツカ」と呼ばれている不思議な土塁遺構をご存知ですか？
今をさかのぼること約1,500年前、第28代継体天皇の父・孝主人王が湖北の坂田郡から高島に來られ、越の国から美しい振袖を呼び寄せ、高島の三尾別業で暮らしていました。その後、二人の間にお生まれになった才木ト王（後の継体天皇）のえなを埋められたとの伝承がある塚が「えな塚」なのです。

えな塚は、現在の安曇川町三尾里に所在する継体天皇伝承地で、市の指定史跡です。安曇川と鴨川で形成された平野部に位置し、塚の南側には「御殿川」と「鴨川」が流れ、その対岸には有名な鴨船荷山古墳があります。塚には「こんでん松」が一本植えてあり、周囲はのどかな田園風景



▲えな塚

が望めます。地元では「えな」が「えなづか」と呼ばれ、朝しまれていきます。

実はこの塚、今から約1,500年前の古墳で、昨年調査を実施しました。その調査により直径12m・高さ2.1mを測る円墳で、墳頂部は直径5m程のやや緩やかな平坦面があることがわかりました。

しかし、内部の施設や古墳の周溝などは確認できず、埋葬施設や築造時期も不明です。

今回、継体天皇即位1500年記念事業のフィナーリとして、桜の苗木を植樹しました。これは琵琶湖汽船から寄贈していただいた苗木で、



▲桜苗木の植樹

三尾里区のご協力を得て、えな塚の近くに植樹しました。越前には継体天皇にまつわる越前市の花壇公園の薄墨桜があります。他に、福井市足羽神社のシタレザクラの古木、足羽川の桜並木。これらの桜が越前地方の春の訪れを知らせてくれます。継体天皇生誕の地である高島市にも、新しい桜の名所として「えな塚桜」が根付いていくことを楽しみにしています。

(文化財課)



花の便りが、聞かれるようになりました。桜もいよいよです。
(花：マンサク)

編集後記

▼夏が過ぎて、スタジアムに元気な声が聞かれています。今月の表紙は、遠くは岐阜県からも参加があった「第2回OBC高島少年野球教室」の様子をご紹介します。教室の途中行われたOBC高島の選手によるデモンストレーション、カインと乾いた音とともに、青空に放たれたボールに子どもたちの視線は釘付け。子どもたちの歓声がボールの行方を表していました。このボールって不思議ですね。その行方、大人も子どもも「一瞬、無我夢中にさせてしまうのですから。直感がバセンチにも満たないこのボールのどこにそんな魅力が宿まっているのでしょうか。白球に夢を託した若者たちのシーズンが今年も始まりました。OBC高島に、皆さんのご支援、ご応援を今年もよろしくお願いします。▼さらなる経費削減と環境に配慮し、広報たかしまは4月15日から、再生牛乳紙の中国1色刷りに変更します。今後も、皆さんに親しまれる広報づくりを努力して参ります。お気づきの点などがございましたら、お気軽に編集広報課へお寄せください。

(広報担当)

歴史散歩

No.42

古代末から中世までの村と暮らしの一端

平成19年度堀川遺跡発掘調査成果から

JR新旭駅周辺一帯の南北約700m×東西約500mの範囲に広がる堀川遺跡では、これまでの調査で弥生時代（1世紀）から鎌倉時代（14世紀）にかけての建物跡などが多数見つかっています。

高島市教育委員会では、平成19年度に市道新庄木津線道路改良事業に先立ち、遺跡の北西部の発掘調査を実施しました。

調査地の地名は「堂田」と呼ばれ、室町時代中頃（14世紀末～15世紀初頭）に作成されたと考えられている「木津荘引田帳」に記されている「浄土寺」と呼ばれるお寺が、この地にあったことが推測されていました。

調査の結果、調査区の南側で平安時代後半（12世紀前半）のお墓や平安時代末から鎌倉時代にかけての建物跡や井戸跡が見つかり、当時の集落の一端が明らかになりました。



見つけたお墓跡と建物跡

残念ながら今回の調査で「浄土寺」の存在を裏づける14世紀末の遺構は見つかりませんでした。しかし、周辺には「中浄土寺」「下浄土寺」「西浄土寺」「四天石」などのお寺に係した地名が残っていることから、今後、これらの地域で「浄土寺」の跡が見つかる可能性が考えられます。

調査では、かわらけ、信楽焼こね鉢、灰釉陶器、磁器、砥石、鉄釘等とともに石鍋が一点出土しています。石鍋は滑石製の約8×10cmの破片で、表面にはススがついていて、両端は鋸のような工具で切断されています。この石鍋の破片について、何人かの研究者から「温石」でないかと指摘されています。「温石」とは石を直接火で熱したり、熱湯に入れたりして温め、布などに包んで暖をと

る携帯の暖房具（現代でいうとカイロ）のことです。



石鍋の破片

用したともいわれています。ほかに禅宗では修行中の飢えしのぎのために温めた石を懷に入れたことから、軽い食事を「懷石」と称するようになったといわれています。懷石料理とは本来、温石で腹部を暖めるのと同じ程度に空腹をしのぐ簡素な料理のこととされています。

今回の堀川遺跡の発掘調査でわかったことは、ほんのわずかですが、今後の調査の積み重ねによって古代末から中世にかけての村の様子や人々の暮らしがより明らかになっていくことでしょう。

（文化財課）

編集後記



くつきの森のハンカチノキ。
薫風に揺れる姿はまさに・・・

▼毎朝、迎えるバスを泣きながら待っていた園児も、もつすつかり笑顔に。山萌える季節は、子どもたちもぐんぐんたくましくなっていますね。

▼今月の表紙は、ゴールデンウィークに行われた「箱館山マウンテンバイク大会」での未就学児限定の自転車レースの様子をご紹介します。子どもからお年寄りまで、年齢・性別を問わず幅広く利用され、生活の中で最も身近な乗り物である自転車。子どもの頃はあんなに乗り回していたのに、大人になるとすっかり縁遠いモノに。歩きでは絶対に行けない距離を、車では通れない細い道をスイスイ進める快適さ。その分を、自力で帰らなければならぬ厳しさ。年齢とともに、後者の存在感は増していきますね。環境にも家計にも優しく、健康づくりに最も適した自転車。長い間、運動らしい運動をしない我がエンジンに火を点すのは、メ・タ・ボの宣告かも。（広報担当O）

歴史散歩

No.46

安曇川町田中古墳群



田中古墳群

は、安曇川町

田中神社の北

側一帯に位置

し、これまで

の調査で、43

基以上の古墳

が存在するこ

とが判明して

います。田中

古墳群の中心となるのは、継体天皇の父

である「彦主人王」が被葬者とされる田

中王塚古墳です。田中王塚古墳は直径58

m・高さ10mの規模で、3段に構築され

る円墳（円形の塚）と考えられ、高島市

内で最大規模の古墳です。現状は、円墳

の一部が突出した形（帆立貝形）となっ

ていますが、これは明治38年（1905

年）の宮内庁による古墳整備によって、

このような形に改変されたものともい

われています。古墳の表面は、「葺石」と

よばれる川原石が貼りめぐられ、周囲

の溝からは「埴輪」の破片が出土してい

ます。死者を安置する埋葬施設は、粘土

槨（木棺を粘土で覆ったもの）または木

棺直葬（木棺をそのまま埋めたもの）と

考えられています。古墳が造られた時期

は、埴輪の年代などから5世紀代とされて

います。

現在、田中王塚古墳は宮内庁の「陵墓

参考地」として立ち入りが禁止されてい

るため、年代や埋葬施設の詳細

は謎のままです。この田中王塚

古墳の周辺には、長さ8m・高

さ2m前後の大きさを有する古

墳が存在します。昭和初期や戦

後の開墾に伴い、鏡や刀などの

鉄製品、須恵器とよばれる土器

などの遺物が出土しています。

これらの遺物から田中王塚古墳

周辺の古墳は、5世紀後半〜6



金銅装馬具 (出土品)

世紀前半に造られたと考えられています。

出土遺物の一部は現在、中江藤樹記念館

に保管・展示され、ご覧いただけます。

昨年の発掘では、九州地域の影響を受け

た横穴式石室が発見されるなど、

高島地域が近畿はじめ九州・日

本海地域と活発な交流があった

ことを示す新発見となりました。

11月には左記のとおり「高島

古代史フォーラム」を開催し、

多くの謎と新たな発見を秘めた

田中古墳群と高島地域出生とさ

れる継体天皇の謎について迫り

ます。

（文化財課）

高島古代史フォーラム

「継体天皇と田中古墳群」

【日 時】 11月29日（土）
13時～16時45分
（12時30分受付開始）

【場 所】 藤樹の里文化芸術会館
（JR湖西線安曇川駅下車）
東へ徒歩約10分

【内 容】

開 会 13時
講 演 1 13時10分～14時
「六世紀の東アジア情勢と
継体政権の政治戦略」
福永 伸哉 氏
（大阪大学教授）
講 演 2 14時～14時50分
「五・六世紀の近江の古墳
～琵琶湖と大和政権～」
高橋 克壽 氏
（花園大学准教授）
基調報告 15時05分～15時30分
「田中古墳群36号墳の調査」
宮崎 雅充
（高島市教育委員会）
フォーラム 15時30分～16時45分
図・田 文化財課 ☎(32)4467

編集後記



感動はいつもファインダー越し。

▼連日の酷暑も落ち着いて、フル稼働していたクーラーも一息。9月に入ってから暑さも和らぎ、朝夕は肌寒く感じるようになりまし。この時期は運動会がそこかしこ。会場では、最高の瞬間を収めようとカメラ群がトラックを包围。感動の瞬間は、今年もファインダー越し!? ▼今月の表紙は、9月5日から1泊2日の日程で行われた今津中学校の「琵琶湖横断カヤックの旅」の様子をご紹介します。マキノサニートレーチから長浜までを4人が交替しながら往復する約60kmの壮大な旅。勇気ある決断は、子どもたちだけでなく大人たちも成長させてくれたように思います。「やればできるんだ！」は、やってみなければ始まらない。学校で学ぶことはたくさんありますね。とうの昔に卒業していても……。

（広報担当）

歴史散歩

No.47

うち おろし
打下古墳の発見

▲現地説明会



平成13年(2001年)11月7日早朝、高島市の東南に位置する明神崎の山腹で行われていた打下浄水場配水施設工事現場から人骨が出土しました。発見当時は、発見された人骨がいつの時代のものであるか皆目見当がつかず、教育委員会が京都大学片山一道先生と奈良文化財研究所豊島直博先生のご指導を受け、発掘調査をすることとなりました。

人骨の出土状況については、長さ2m強の箱形の石囲いに納められ、内部は朱やベンガラで赤く塗られていました。出土人骨のほかには鉄刀一振と鉄剣一口が納められていました。

調査成果は、次の通りです。

・古墳名 打下古墳
・所在地 高島市勝野
(打下・日吉神社)

・築造年代 古墳時代中期
(約1500年前)

・主体部 箱形石棺(棺内朱塗り)
・副葬品 石棺内に鉄刀一振
鉄剣一口と鹿角装具
石棺外に鉄鍬一束
(約10本程度)

・被葬者 40〜60歳前後の男性
・身体特徴 小柄な人物でおそらく
身長155cm前後

・埋葬法 仰臥伸展葬(仰向け)

ここで重要なことは、めったに良好な状態で出土することのない人骨が美しく検出された事です。というのも、我々の住んでいる日本列島の



▲復顔

土壌は酸性度が強く、土中の人骨は大半が解けて土と化するからです。

今回は頭蓋骨であることから、片山一道先生にお願いして出来上がったのが写真にある人物像です。

復顔人物像の特徴を一言で言い表すと、「のつべり」した顔。言い換えますと、現代の関西圏にお住まいの中年男性に多い顔立ちと言えます。

この復顔人物像は、現在、高島歴史民俗資料館に展示されています。復顔人物像のほかにも、人骨と一緒に出土した副葬品や発見当時の資料も展示してあります。ぜひ一度ご覧下さい。

(文化財課)



【高島歴史民俗資料館】

所在地 高島市鴨2239
電話 36-1553
休館日 月・火曜日
開館時間 9時〜16時30分

編集後記



秋は夕暮れ...
空気が澄んで美しくなってきました。

▼夕焼け小焼けで 日が暮れて...
虫や魚を追いかけて、夕焼け空になると今日はおしまい。豊かな自然に囲まれ育った記憶がよみがえります。

▼大きさは日本で一番、古さは世界で3番目、1,000種類を超える動植物が生息している琵琶湖。高島市の子どもたちは、さまざまな形でこの琵琶湖にかかわっています。今月の表紙は、10月10日から1泊2日の日程で行われた安曇川中学校の「ツールドびわ湖」の様子をご紹介します。自転車で琵琶湖を一周するこの事業は今年で5回目。「おはようございます」とさわやかなあいさつに、「がんばれ」のひとことに旅の無事を祈ります。全行程約160キロ。ペダルを踏みしめて走って見た琵琶湖は、彼らにはどのように映ったでしょうか。気持ちをきっかけに、琵琶湖のためにできること。命を水の始まりの地として「知っている」から「している」へ、「みんなの1歩へ」とつながっていきたいですね。

(広報担当O)